



—湾岸・アラビア半島地域ニュース—

サウジ・UAE・カタール：中国首相の湾岸歴訪

イランの核開発を巡り西側諸国とイランの緊張が高まる中、中国の温家宝首相が1月14日から19日まで、ペルシャ湾岸産油国のサウジアラビア、UAE、カタールを歴訪した。制裁などで追い込まれているイランは最近、原油輸送の大動脈であるホルムズ海峡の閉鎖も辞さない構えを見せた。ほぼ同時期に日本の外相と経済産業大臣政務官が同じ湾岸地域を訪問していることから、温首相の湾岸歴訪は注目された。

<温首相歴訪の概要>

温首相は、最初の訪問先のサウジで同国のアブドゥラー国王兼首相（15日）やナーイフ皇太子兼副首相（14日）とそれぞれ会談した。

16日に到着したUAEの首都アブダビで温首相は、ハリーフアUAE大統領や、アブダビ首長国のムハンマド・ビン・ザーイド皇太子と会談したほか、翌17日には、隣的首長国ドバイでムハンマド・ビン・ラーシドUAE副大統領兼首相（ドバイ首長）と会談した。

また、アブダビ滞在中の16日、温首相は、同地で行なわれた第5回世界未来エネルギー・サミットの開会式に出席し、挨拶した。

温首相は18日にはカタールを訪問し、同国のハマド首長やハマド・ビン・ジャーセム首相兼外相と会談した。

中国の要人としては、胡錦濤・国家主席が2009年2月にサウジ、2007年1月にUAEを、そしてカタールは習近平・国家副主席が2008年6月にそれぞれ訪問している。

<中国・イラン関係>

世界の注目とは裏腹に、中国や訪問先の湾岸アラブ諸国の報道の中で、温首相の訪問で機微に触れる問題が扱われたことを明示するものはほとんど見当たらない。例外的だったのが、カタールのハマド・ビン・ジャーセム首相兼外相との会談の際、温首相がイラン問題について緊張を速やかに緩和することの重要性に言及したという新華網（中国）の報道である。同じ記事によると、温首相はさらに、中国がイランの核兵器開発・保有に反対し、中東非核地帯の設置を支持していることを明言したという。

一方、湾岸諸国歴訪を締めくくる形で18日にドーハで開かれた記者会見では、湾岸アラ

ブ諸国との二国間関係にとどまらない幅広い問題で質疑応答があった模様だ。この席で温首相が、今回の歴訪が石油確保のためであったという見方を批判したことがカタルのラーヤ紙の19日付紙面の見出しになっている。さらに温首相は「どのような条件の下でもホルムズ海峡の航行の自由は維持すべきだ。航行の自由は人類全体の利益に関わっているからで、この問題において極端な措置をとれば、世界各国人民の願いに背くことになる」（新華網日本語版19日付記事）とした上で、中国のイランとの石油貿易は「通常の通商行為」とであると、これを正当化した。

<日本の石油外交>

中国首相の湾岸歴訪に並行する形で日本の経済産業省の柳沢大臣政務官も同地を歴訪していることは興味深いと言えよう。同政務官は15日、サウジでアブドルアジーズ石油・鉱物資源次官（王族）と会談した。また同政務官は、17日にUAEでアブダビ国営石油会社の総裁と会談した。ホルムズ海峡閉鎖の緊急事態を念頭に何れの会談でも、日本は原油の安定供給の要請に対して先方から前向きな回答を得たという。

柳沢経産政務官の湾岸歴訪に先立っては、玄葉外相が1月7日から10日にかけてサウジ、カタル、UAEを歴訪した。その際、これら3カ国が「我が国が必要とする原油・LNGの供給を行う用意がある旨、また原油の価格の安定についてもサウジアラビア及びアラブ首長国連邦が協力の意向を表明」（日本国外務省HP）したという。

しかし、こうした「口約束」はアラブ人特有のリップサービスに過ぎないという冷めた見方があるのもまた事実である。

（研究員 河井 明夫）